

## Sky Seminar

## モーション／エモーションの映画学

「僕は三十七歳で、そのときボーイング747のシートに座っていた。その巨大な飛行機はぶ厚い雨雲をくぐり抜けて降りし、ハンブルク空港に着陸しようとしているところだ」(村上春樹『ノルウェイの森』)。  
着陸が完了し、「やれやれ、またドイツか」と呟く主人公をよそに、機内にはBGMが流れ出す。それはオーケストラが演奏するビートルズの「ノルウェイの森」。主人公は混乱し、CAがかけよる。「大丈夫です、ありがとう」と、彼は平静を装うが、意識は記憶の中へ——草原、1969年秋、20歳の自分。そして、物語が動き出す。

飛行機はセンチメンタルな記憶と相性がいい。機体の加速・減速が、心地よい眠りを導き、乗客は「夢」を見るだろう。或いは、『ノルウェイの森』の「僕」のように、記憶へとタイヴしてもよい。この感覚、何かに似ているような……。機内はまるで映画館ではないか！ 暗がり、固定された座席、そして夢の世界。身体の不自由が、精神の「自由」となり、観客・乗客は「夢」を見るのだ。

映画と飛行機、或いは映画と「乗り物」。映画史を紐解くと、両者は長い蜜月の時を過ごしてきた。19世紀末の列車(そして20世紀初頭の自動車)が、「運動」の代名



詞だったのは周知だろう。これら動く被写体を如何にフィルムに収めるか。これが後進メディアたる映画の宿命であり、すべてであったことは言うまでもない。運動をスクリーンに再現すること。それは奇術に等しい。世紀末転換期、初期映画は、蒸気機関をその被写体を選び取る。リュミエールの『ラシオタ駅への列車の到着』(1895年)が好例だろう。客車の到着と降り降りする人々だけを捉えた50秒ほどの映像が、世界を震撼させたのだ。以後、映画は「運動」に拘りながら「情動」、つまり人々の感情や機微を映すようになる(『トンネルでのキス』(1899年)というタイトルは象徴的だろう)。物語を獲得した「映画」は、こうして表象メディアの帝王となるのだ。

乗り物は地上から空へ。飛行機は今や映画には不可欠な舞台。それはときに男女の「出会い」を導く『めぐり逢い』(1994年)では、NYへ向かう機内で、ウォーレン・ビーティとアネット・ベニングが運命的な出会いを果たす(キャプラの『或る夜の出来事』(1934年)の飛行機ヴァージョン!)。幸福な瞬間・物語は、飛行機から始まるのだ。

映画学は製作から興行まで、広大な領域を扱う研究ジャンルである。メディア、表象文化、研究のアプローチは多様だが、その始まりは、「運動」と「情動」。センチメンタル／ロマンチックなフライトは、映画研究とも相性がいいのだ。

## 塚田 幸光

関西学院大学  
法学部准教授

つかだ ゆきひろ

1971年茨城県生まれ。専門はアメリカ文学、映画学、表象文化論。文化と欲望の性政治学に関心がある。立教大学大学院文学研究科博士後期課程清瀬進学後、防衛大学校准教授を経て、2008年より現職。専門書に『シネマシエンター アメリカ映画の性と戦争』(重書、臨川書店、2010年)、『メディアと文学が表象するアメリカ』(共著、英学社、2009年)、『911とアメリカ』(共著、風書房、2008年)など。語学書も多数。



関西学院大学  
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

西宮上ヶ原キャンパス  
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号  
●神学部●文学部●社会学部●法学部●経済学部●商学部●人間福祉学部●国際学部

西宮聖和キャンパス  
〒662-0827 兵庫県西宮市岡田山7番54号  
●教育学部

神戸三田キャンパス(KSC)  
〒669-1337 兵庫県三田市学園2丁目1番地  
●総合政策学部●理工学部